# 穴太廃寺

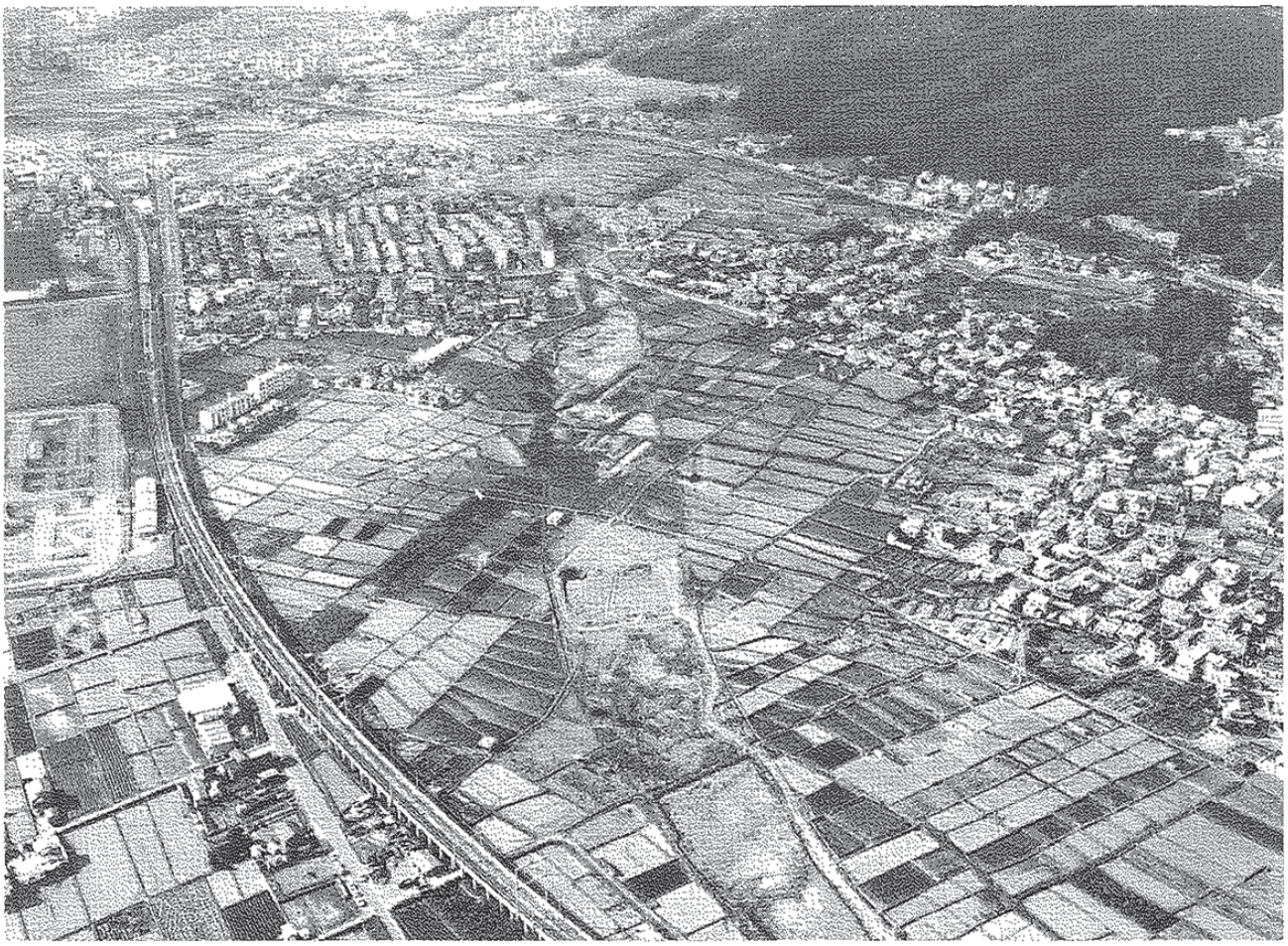
**はじめに**

大津市北郊は、かつて天智天皇の近江大津宮が営まれた地として良く知られています。天智６年(667) に遷都されてより、壬申の内乱(672) で廃都となるまでのわずか６年という短かい歳月ではありましたが、今、私たちは、残された数々の遺跡を通して当時を伺い知ることができるのです。

ご存じのように、大津宮の所在地については、長らく論争がつづいておりましたが、昭和49年末、錦織２丁目字御所之内での発掘調査で大津宮の一部とみられる建物跡が発見され、ついに終止符が打たれることになりました。

ところで、周知のように大津宮周辺には、その前後する時期に建立されたとみられる崇福寺跡、南滋賀町廃寺、園城寺遺跡などがあり、これら諸寺院は、大津宮と密接な関係をもつものと考えられています。そして、ここで取り上げる穴太廃寺も、また大津京域の最北端、北陸道の交通の要衝に位置しており、上記の諸寺院と同じく大津宮と不即不離の関係にあったと考えられるのです。

穴太廃寺については、早くから上記の諸寺



穴太廃寺付近（航空撮影）

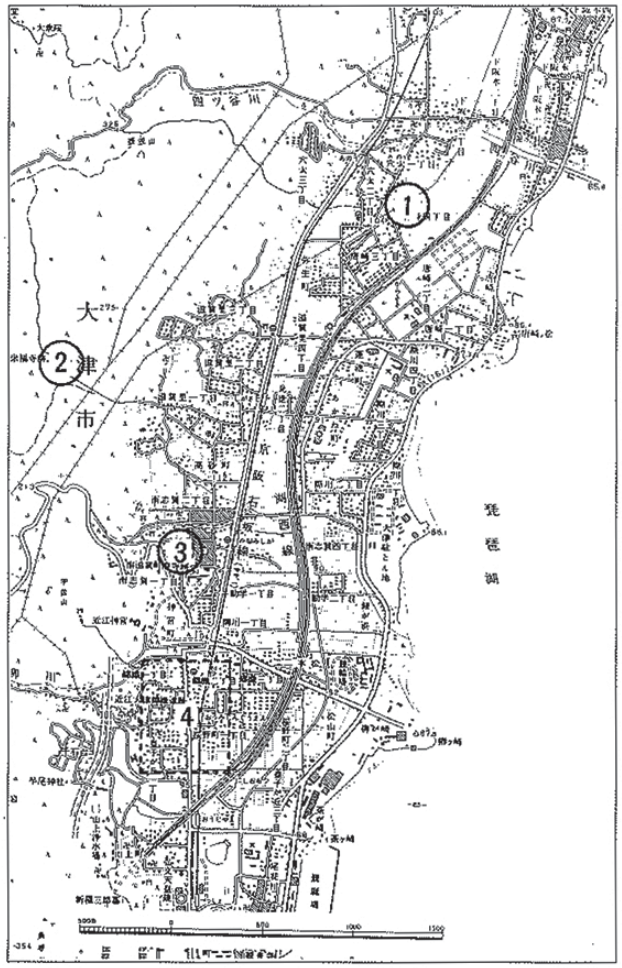
1985．2．20

財団法人　滋賀県文化財保護協会

院と同系統の瓦類が出土することが知られており、昭和48年の保育園建設に伴う発掘調査で、寺院の一画とみられる遺構が発見されるなど、その存在については、すでに予想されていましたが、昭和59年４月から始められた滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会による国道 161号西大津バイパス建設予定地内における発掘調査でこれまでに時期の異なる二つの寺院遺構の中枢部が、きわめて良好な状態で遺存していることが明らかになりました。ここでは、仮に古い方の寺院を創建の寺院、新しい方の寺院を再建の寺院として説明したいと思います。

**発見された遺構**

**創建の寺院**　再建時に整地されたため、削平を受けていますが、西金堂、塔、西回廊などが良好な状態で検出されています。寺院中軸は、真北より約35度東に振り、西に小金堂、東に塔を配し、これを回廊が廻るもので川原寺式の伽藍配置をとるものとみられています。




位置図　1．穴太廃寺　2．崇福寺跡　3．南滋賀廃寺　4．大津宮跡

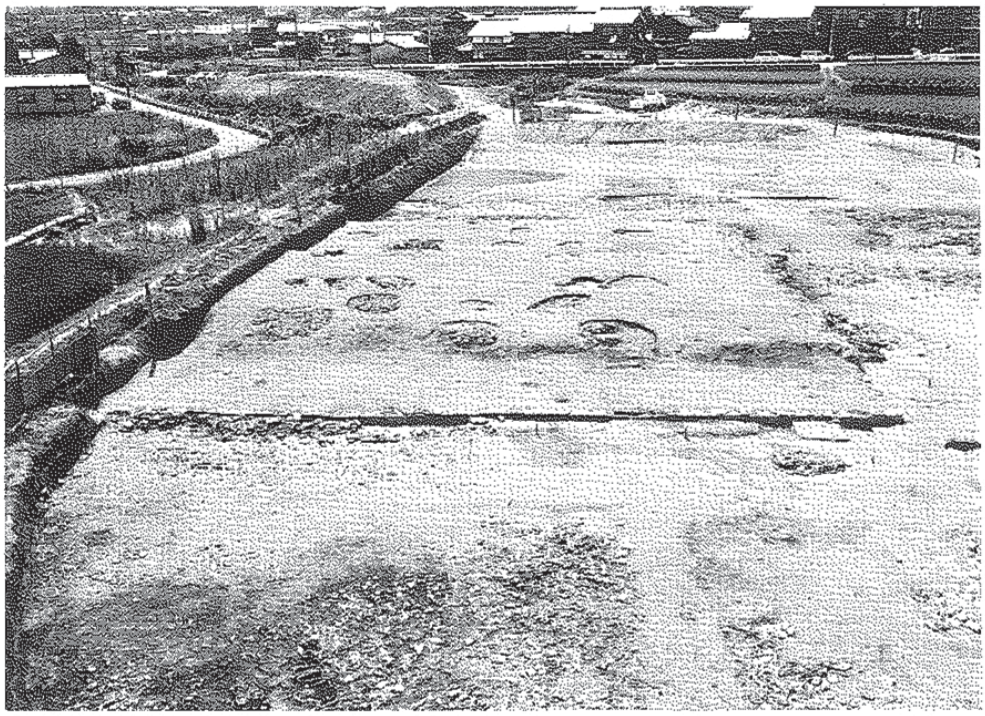
〈西金堂〉　寺院の本尊を安置したとみられる建物で、重い建物を支えるため、土を薄く何層にもつき固めながら積み上げて基壇を築くのですが、その廻りにすえられた地覆石（じふくいし）が良好に残存しており、東西12ｍ・南北14ｍの規模であることが判明しました。当初は、地覆石の上に瓦を積み上げ化粧した瓦積基壇（かわらづみきだん）であったとみられ、北西コーナーの地覆石の上に再建講堂の基壇の南東コーナーが重複しており、二つの寺院の前後関係が一目で判明するのです。なお、基壇規模は、同じ川原寺式の伽藍配置をとる南滋賀廃寺の西金堂とほぼ一致します。

〈塔〉　北辺と西辺の基壇地覆石が良好に残っており、すべて凝灰岩の切石を使用しています。近江においては、凝灰岩の有力な産出地は認められず、他地方からの搬入品とも考えられています。一辺12ｍ前後の規模とみられます。

〈西回廊〉　西金堂の西辺から８ｍ西の地点で、基壇地覆石列と一部の礎石が検出されました。基壇の規模は、幅４ｍで、再建講堂の下を潜って北に伸びており、一部で塔と同じように凝灰岩の切石が地覆石に使用されています。

**再建の寺院**　創建の寺院と同じ場所で、方位をかえて建て直したもので、金堂、塔、講堂など寺院の中枢部がほぼ完全な状態で検出されました。寺院の中軸は、真北より約 2.4度東に振っており、西に金堂、東に塔、北に講堂を配した法起寺式の伽藍配置をとっています。

〈金堂〉　寺院の本尊が安置されていたとみられる建物ですが、瓦積基壇が良好に残っており、東西 23.04ｍ・南北19.4ｍ前後・高さ1.2ｍ以上の規模で、長さ65.0cm前後、高さ25.0cmの花崗岩の板石を横に立てかけた地覆石の上に、ていねいに平瓦が積み上げてあり



穴太廃寺再建金堂跡

ます。礎石は、水田化の際に大部分抜き取られ、一部、横に穴を掘って落とし込まれているものもあります。抜き取り跡から推定される建物は、身舎、廂のいずれも２間×３間の特異なもので、類例としては、奈良県山田寺跡の金堂にみられるにすぎません。

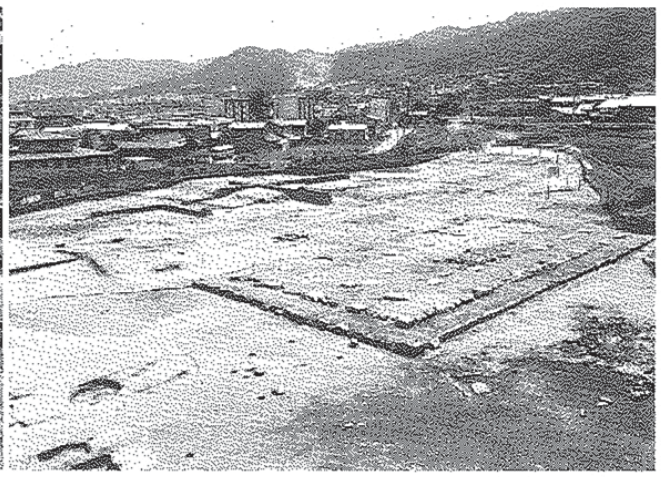
〈塔〉　瓦積基壇であったとみられますが西辺にその痕跡が一部残るだけです。地覆石の抜き跡などから一辺約12ｍの規模をもつものと考えられます。基壇まわりには、瓦溜が広がり、一部では、葺かれていた状態の方形平瓦が折り重なって出土しています。

〈講堂〉　寺院の僧侶が法要や学習を行なっていた建物で、基壇および、礎石がほぼ完存しており全容が伺えるものです。基壇は、花崗岩の自然石を一段廻らしたもので、東西28.21ｍ、南北 15.44ｍ、高さ 0.6ｍを測り、建物は、５間×２間の身舎に四面廂をつけたものです。礎石は、約１ｍ前後の方形の自然石を使用しており、上面をわずかに平坦に加工したものです。廂部分の礎石間には、40～60ｍ幅で二列（扉部分では一列）の地覆石が検出され、壁に伴うものと考えられます。また身舎内中央には、仏壇の下部構造が良好に残っており、平安時代の始めに大きく拡張されていることが判明しました。

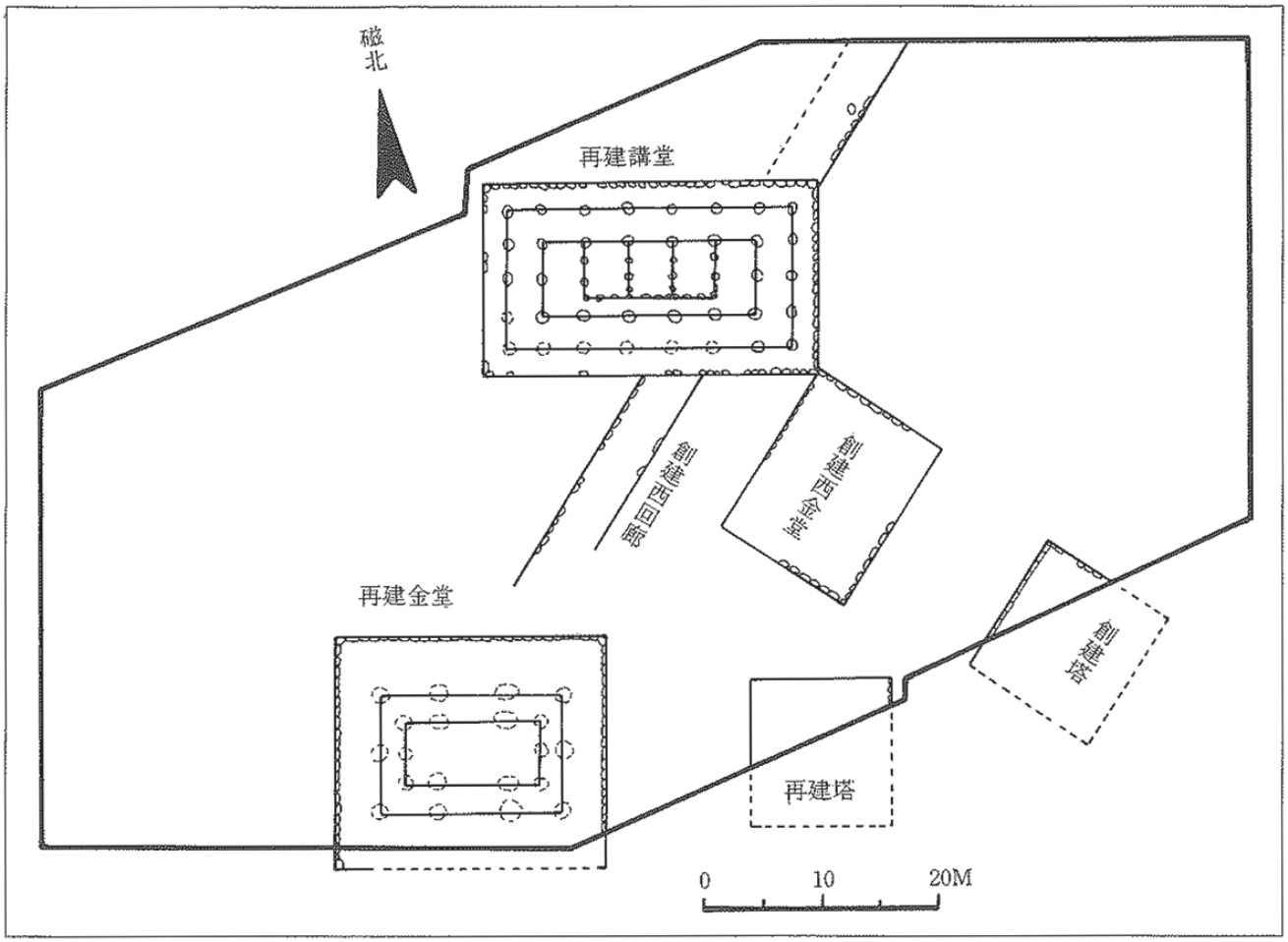
**出土遺物**

出土した遺物は、大部分瓦類で、他に７世紀後半から10世紀初頭にいたる時期に比定される須恵器、土師器をはじめ、三彩陶器、緑釉陶器などの土器類と青銅製品、鉄製品などがあります。特殊なものとしては、再建講堂の須弥壇内より出土した大量の泥塔、須弥壇背面より出土した銀製の押出仏、須弥壇内部

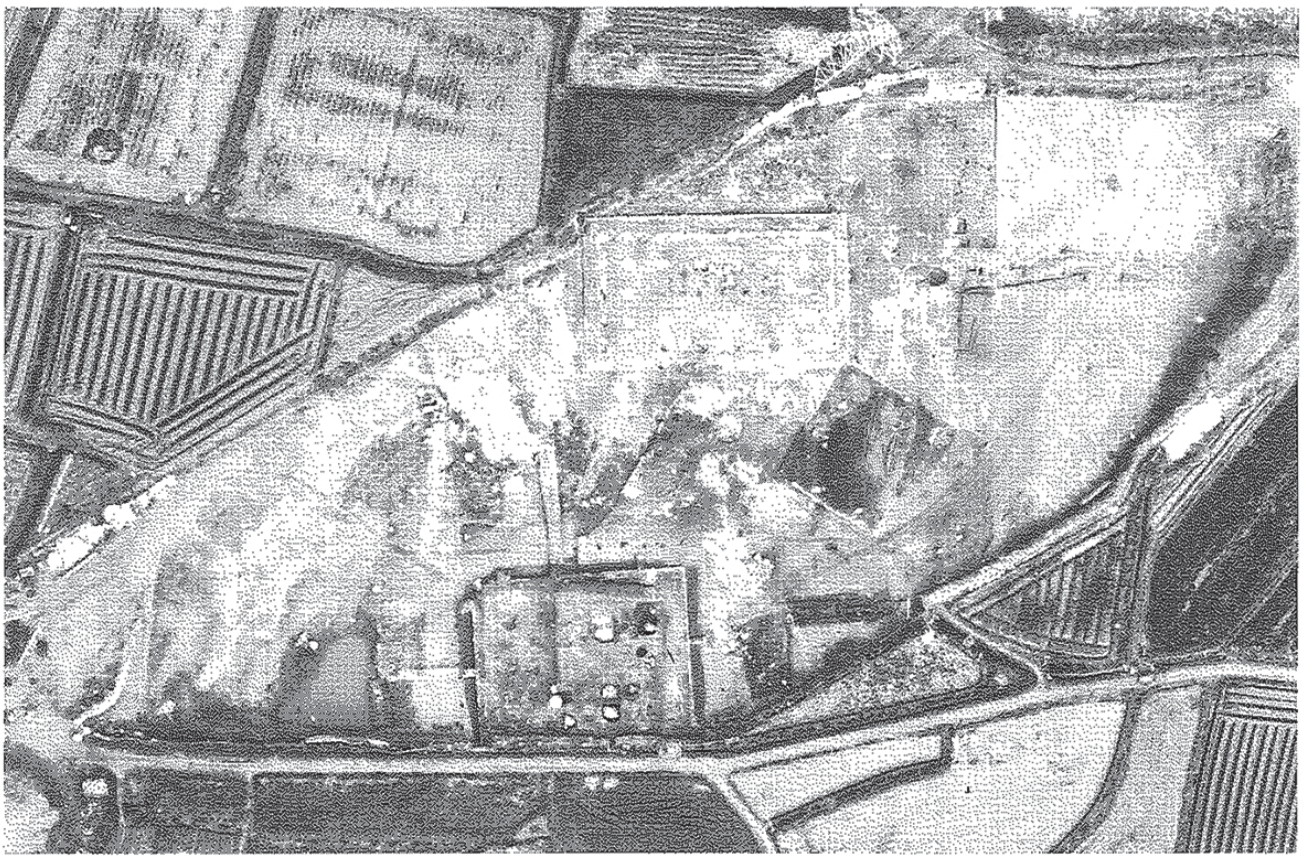
穴太廃寺再建講堂跡(東から)



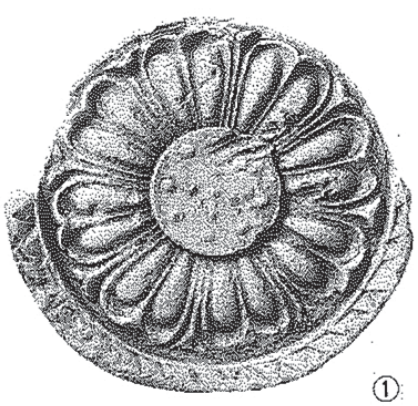
穴太廃寺主要伽藍(北東から)



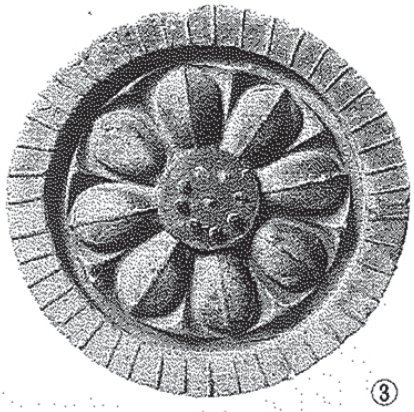

穴太廃寺検出遺構概略図



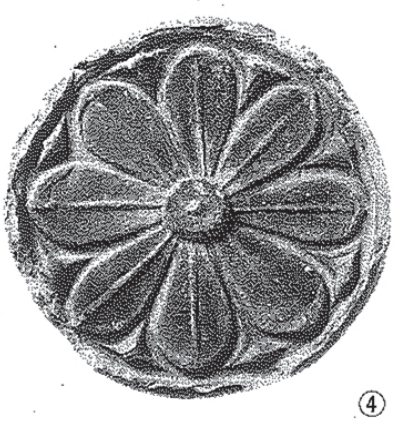
穴太廃寺検出遺構（航空撮影）



①



③



④

②

| | |
|---|---|
| 穴太廃寺出土瓦 | A系統①②　B系統③<br>C系統④ |

より出土した塼仏・塑像の丈六仏のものとみられる螺髪などがみられます。ここでは、瓦類と押出仏、塼仏を取り上げて説明しておきましょう。

〈瓦類〉　大きく三つの系統に分類されます。

A系統・白鳳期に通有なもので、いわゆる川原寺式複弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦と平瓦、丸瓦からなります。

B系統・大津市北郊の白鳳寺院にのみみられる特異な瓦で、単弁蓮華文軒丸瓦、素文方形軒平瓦と方形平瓦、丸瓦からなります。

C系統・近江で最古とみられる飛鳥時代末期に比定される単弁蓮華文軒丸瓦のみが知られており、類例としては、京都市北野廃寺、播技瓦窯、宇治市隼上り瓦窯などにみられます。

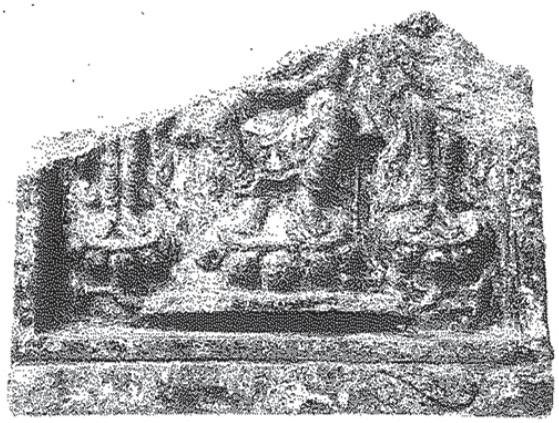
以上3系統のうち本遺跡出土瓦の大部分をしめるA、B系統は、崇福寺跡、南滋賀廃寺、園城寺遺跡などの諸寺院のものときわめて類似しており、大津宮時代に使用されたとみられていますが、榿木原瓦窯においては、両者が交互に焼成されたことが確認されています。これに対し、C系統は、再建講堂の北東部および北西部から若干出土しただけで、大津宮時代以前、飛鳥時代の末期のものとみられます。

〈押出仏〉　再建講堂須弥壇背後から出土したもので、現存高 6.7cm、最大幅 4.6cm、面幅 2.3cm、面長 1.6cmをはかる銀製の押出菩薩像頭部残欠です。厚さ 0.2mm程度の銀板を半肉の雄型の上に打ち当てて鎚起したもので、像容の縁は切り落とした後2mm前後裏に折り曲げて仕上げています。形状は、頭部に三面飾りの宝冠を戴き、左右耳辺上部から冠帯をたらし、頸部には玉緊ぎの頸飾をつけています。頭部背後には、宝珠形の頭光背をつけ、光背は、一重の圏円の外に珠文を連らねめぐらし、その縁に火焔を彫出したものです。

銀製の押出仏

銀製の押出仏は、本品が唯一であり、技法的にもきわめて完成度の高い優品で、朝鮮半島からの舶載の可能性もあると考えられます。独尊として礼拝の対象とされたもので、７世紀後半代に製作されたものと推定されます。

〈塼仏〉　再建講堂の須弥壇東側より出土したもので現存高約８cm、幅10.9cmをはかる小型の火頭塼仏です。厚みは、底部で約５cmと厚く、上にゆくほど薄くなっており、自立式の礼拝仏と考えられます。上半が欠失していますが、良好な保存状態で、金箔がかなり残存しています。像容は、中央に定印を結び宣子座に腰をかけた如来像を置き、左右の蓮座と直立した脇侍を配しており、如来像の足にまとっている衣文の線や、脇侍の両肩から垂れる裳裾の線などがきわめて明瞭に表現されており、製作技術の高さを示しています。そして周縁には、素縁をめぐらしています。このような礼拝用の塼仏は、従来出土例はありませんが、白鳳期のものと推測されます。



塼　　仏

**まとめ**

以上のように穴太廃寺は、きわめて保存状態の良好な寺院遺構であります。今後、大津宮との関連を含めて種々な問題を提起するものと考えられますが、ここでは、少し簡単な検討を加えておきます。

まず、再建寺院が10世紀初頭まで存続していたことは、金堂、講堂の遺構面や基壇修復

「庚寅年」文字瓦

部からの出土遺物で確認されています。創建・再建の年代は、現在のところでは、大津宮時代前後としか特定できませんが、ただＣ系統の瓦の存在により、これを創建時代のものと考える可能性もあります。すなわち、再建金堂の北側より出土した平瓦に、「庚寅年」と訓むことができる、ヘラ描き文字がみえ、これを630(舒明２）年の創建年代を示すものと考えた場合、穴太廃寺は、飛鳥時代末に穴太地域の古地割にのっとって創建され、大津宮時代になって、何らかの理由により、「大津京域」の地割（大津宮に関連した地割）にのっとって同じ場所に再建されたものと考えることができ、創建・再建の過程が、比較的スムーズに理解されるのです。

ただこのように考えた場合、いくつかの問題、たとえば、Ｃ系統の瓦の出土が、きわめて少量で、必ずしも創建の遺構に伴わないこと、Ｃ系統の瓦と「庚寅年」の文字瓦との関連、あるいは創建寺院の伽藍配置の問題などが残されており、今後の調査の進行を待ちたいと思います。　　（大橋信弥氏提供）